

文久年間の商用会話本と

その編者 Eugene M. Van Reed について

福田光子

1 はじめに

本題は、私自身の個人的興味から書か
るべくして書かれた研究の主題ではなく
て、実は、はるばる海を越えて寄せられ
た一アメリカ人からのレファレンスの内
容なのである。恐らく、得体の知れない
和英対訳の古本を前にして、この問い合
わせの主は、一体これが百年以上の昔極
東の地で何者の手で作られたものかその
素姓を求めようという興味から、こと
よったら、とんでもない掘出し物か、あ
るいは今となっては忘れ果てられて一顧
だもされない紙屑同然のものなのか、あ
る本の運命と共に、歴史の波間に沈んで
いった一人の著者の存在に何か光をあて
てみたいという衝動がこの人を動かした
のであろうかと想像され始めた。英文の
手紙から要旨だけを掲げよう。

I own a handbook of commercial phra-
ses in English and Japanese by Eugene M.
Van Reed published at Kanagawa, Japan
in 1861.

Presently I am trying to find more infor-
mation about this book. I would appre-
ciate anything you might know concerning
this book or Eugene M. Van Reed.

I have written to other libraries in the
United States, but they seem to know
nothing about the book or its author.

文面では、“a handbook of commercial

phrases in English and Japanese”と
称する文久年間の英和対訳本とその編者
の消息を求めていることを真剣に伝えて
いる。レファレンス分担上、経済社会課
に投げこまれたこの内容に、いささか戸
惑いを覚えながら文献のしらべをすすめ
てみるうちに次第に興味を募り、ややレ
ファレンス回答の範囲を逸脱した感を免
れないが、その経過をノートしてみた。

2 『和英商話』と『商用会話』

“a handbook of commercial phrases
in English and Japanese”を仮に素直
な訳名を付けたとしたら「英和商業会話
ハンドブック」となるうけれど、文久年
間に、こんなきらびやかな軽い訳名を付
けよう筈もないし不確かな書名からの検
索はあきらめなければならない。

著者 Van Reed, Eugene M. は、オ
ランダ系米人名であろうが、少くとも当
館目録上には全く現われてこないのでは
ある。

あとは刊行年の1861年を手がかりにす
るほかないのだが、この場合<1861年>
がまさに洋学年表の上の決め手となっ
た。

大槻如電原著佐藤栄七増訂 日本洋学
編年史 錦正社 昭和40年

(402.105—O941_n)

本書は室町時代の天文元年(1532)か

ら明治10年(1877)までの345年間に、欧米からわが国に渡来した学術文物を中心とした文化的事象をクロノジカルに記載した極めて精緻な歴史的記録である。原著者の大槻如電は仙台藩儒者大槻磐溪の長男であり、大槻文彦博士の実兄であるが、家督を弟文彦にゆずり悠々自適して学問に専念す、と人名辞典にも見えているが、この碩学は、洋学年表においても、「人物には事略より没年、年令、墓所に及び、書物の場合は解題を付し、雑事には旁証となるべき記事を添え、読み興味あるものにせんと筆したり」と序にするしてはいるとおりに、この長大な年表を繰ると、洋学文献についての手がかりは十分に得られる筈である。

そこで、『日本洋学編年史』の1861年を調べてゆくと、11月に次の記載に逢う。文久元年辛酉 2521 (1861) 11月。

英和商話(1冊) 米入ウエンリード撰。

商業用のために編述したるものなり。ローマ字綴方と会話とより成り、その和文の序に、「この文章、わがこころをくだきしためなれば、日本の諸君子、これを学びつうじたまはば、予がよろこぶごと、これにすぎず、文久元酉十一月神奈川アメリカン・ウエンリット」とあり。ウエン(ヴァン)リード(Van Reed)は曾て布哇領事たりしが安政六年本邦に来て横浜に住し、邦人の海外移民を企てて問題を起し幕府これを禁止したることあり。慶応四年岸田吟香と共に「横浜新報もしほ草」を発行せり。

以上が、同書における Van Reed 関係記事の必要部分の引用である。『英和商話』なる書名が登場し同時に『横浜新

報もしほ草』が浮かび上ってくる。文献探索の道すじににわかに明るいものがさしこんできたというものだが、当館の目録類をあらためて検索しなおしても、『英和商話』という書名はやはり見当たらない。出版地が神奈川となっているので、郷土資料の広範な収集で定評のある神奈川県立図書館の郷土資料解説目録にあたると、同目録には次のような記載がある。

ウエン・リット K83. —2

和英商語 Eugene M. Van Reed著

横浜 師岡屋伊兵衛 文久2

(1862) 47丁 18cm 和

「横浜新報もしほ草」の主辛者ウエン・リットの著。日英会話のための書。筆記体の英文に仮名による読みと意味を付す。仮名アルファベットを付す。(『神奈川県立図書館郷土資料解説目録』 pp. 224—225)

ここでは「英和」でなく「和英」であり、「商話」ではなく「商語」としてあらわれる。『日本洋学編年史』の1861年の項の記載では『英和商話』であり、ここでは『和英商語』である。しかも刊年は1862年。両者は同一著者の異なる2冊の著作なのであろうか。あるいは、何れかの記載上の誤りでもあろうか。

ここにその解明の糸口になる一冊の貴重な研究文献がある。

重久篤太郎 日本近世英学史 教育図書株式会社 昭和16年

(830. 7—Si286_n)

本書は、日本洋学の中心をなす近世の英語発達の過程を歴史的に考察した研究労作を一書にまとめたのであるが、著者

は京都大学や東北大学図書館で司書として長い蓄積をもつだけに、文献については可成り詳細である。語学篇、文学篇、伝記篇と分かれているが、この伝記篇の中に次の一章が含まれている。

「幕末・明初に於けるヴァンリードの文化活動」(同書pp. 295—314)

この中で、Van Reed が編纂した日本関係の著述は、ほぼ次の4種と考えてよいのではないかとしている。

- (1)商用会話 1冊 文久元年(1861)
- (2)和英商話 1冊 日新堂梓 文久2年(1862)
- (3)新改正万国表 明治5年 小一鋪
- (4)横浜新報もしほ草 第1編—第42編
(慶応4年閏4月11日—明治3年3月13日)

著者重久氏の解題によれば、(1)の『商用会話』も(2)の『和英商話』も共に平易な英和対訳の日常会話を集録したのでであると述べている。神奈川県立図書館が所蔵しているのは(2)の『和英商話』である。『和英商話』が神奈川県立図書館の目録の上で『商語』となっていたのは、その後同館で直接目で確めた結果は、よくある印刷上の誤りであって、現物は文久2年新鑄とあり日新堂梓版に間違いはない。

重久氏の解題によれば、『和英商話』には2版があり、初版には文久元年(1861)の著者の英和両方の序文があるが、他の再版には文久2年の日新堂主人の序文があるだけでVan Reedの自序はない、ということになっている。ところが神奈川県立図書館蔵の文久2年新鑄の再

版にも、著者 Van Reed の和英両方の自序がついているのである。しかもその自序は、重久氏が、『和英商話』ではなく『商用会話』の方にあるとしている片仮名の邦文序「コノ文章ワガココロヲ、クダキシタタメタレバ、日本ノ諸君子、コレヲマナビ、ツウジタマハバ、予ガヨロコブコトコレニスギズ文久元酉十一月神奈川アメリカン ウエンリイト」がある。このことは『商用会話』と『和英商話』とが同じ Van Reed 編の異なる二種の会話書ではなくて同じものの初版が『商用会話』(1861)であり、再版が『和英商話』(1862)なのではあるまいか。そして、肝心の、わが求むる “a handbook of commercial phrases in English and Japanese” は、初版の『商用会話』にあたるのではないか。ここに至ってなお確認を得られぬもどかしさだけが残るのであるが、あくまでその疑問は消えない。

3 Van Reed の人物像

照会者の文意に則して次に著者 Van Reed についての人物文献の探索をすすめるなければならないが、一口でいえば、この人物についての研究は未だ一般には極めて不十分で、暗い霧りにとざされている部分が多く、いわば「伏せられたるカード」である。単独に扱った彼の伝記資料は皆無に等しい。関係文献は、いずれも中心人物としてより端役として登場するものばかりであるが、人物文献として、中心に据えて考察をすすめるには次の3点が基本資料として適切であろう。

○小野秀雄 ヴェンリード(Eugene M. Van Reed)の伝 明治文化研究会編 横浜新報もしほ草(翻刻本) 福永書店 大正15年

(070・21—M879-O)所収

○「もしほ草」の協業者ヴァン・リード 杉山栄 先駆者岸田吟香 岸田吟香 顕彰刊行会 昭和27年

(289.1—Ki264S)所収

○幕末・明初に於けるヴァン・リードの文化活動 重久篤太郎 日本近世英学史教育図書株式会社 昭和16

(830.7—Si286n)所収

手法の常道をゆくならば、以上の文献に若干の補足資料を加えながら、年譜的に彼の事績を辿ることになるが、再び『日本洋学編年史』をひらいて、そのきっかけをつかむことにすると、

安政六年己未(1859)六月、米国ウェンリード(1名ヴァン・リード Eugene M. Van Reed)米国船ウォデラー号にて神奈川に渡来す。彼は支那名を彎理度といひ、浜田彦蔵の知人にて、その渡来彦蔵と前後す。渡来後、神奈川駐在の米国総領事書記生となり彦蔵と共に領事館の事務に従事。

この間の事情は著名なヒコの自叙伝『開国逸史アメリカ彦蔵自叙伝』ぐろりあそさえて、昭和7年(289.1—A461a)に詳しい。安政6年(1859)に来日し、明治6年(1873)にその生涯をハワイの地で閉じたといわれるまで約14年間。必ずしも長いとは言えない期間の大半を日本の地で過した彼の事歴をさらに追うことにしよう。

安政6年来日の2年後に、その編述に

なる『商用会話』もしくは『和英商話』が上梓されているが、実際にはこれが会話本として版を重ねるほど幕末の重要な英語文献であったのかと奇異な感をもつほど対訳の日本語は稚拙である。当時の日本の外国語の需要に着目して来日二年にして早くも会話手引書を編述すると云った先物買的な適応力が彼の資質なのであろう。彼がいつまで米国領事館の職にあったのかは不明とされているが、その後は新開港の地横浜で外商の一人として多くの当時の外国商人と同じように武器の買込みや外米の輸入、汽船の仲買などで巨利を占めたとされている。しかし単なる企業的野心のためだけに彼の活動の領域が限定されていなかったことは彼の人物像に興味あるものに仕立てていることは間違いない。

文久3年には生麦事件のあおりを受けて英国艦隊の薩摩攻撃を受けるが、その際、英国側に捕えられた薩摩の寺島宗則や五代才助が抑留されたまま横浜に回航するや清水卯三郎と共にVan Reedは彼らを逃れさせて、かくまうことに手を貸している。このことは福沢諭吉の『福翁自伝』にくわしい(『福翁自伝』岩波文庫版(289.1—H826h) pp.145—150)。来日3年余にして国事に奔走する藩士や覆面の志士らと通じていたらしいが、後には佐幕的といわれる彼が薩摩藩士の危機を救うといったところが、商買柄とはいっても不思議というほかはない。

慶応元年(1865)には駐日ハワイ総領事の任命を受けているが、当時夙に日本とハワイとの交渉に着目し、それが後の

ハワイ出稼人斡旋問題に連なってゆく端緒となる。この年、一時帰米したが、その帰路ハワイに暫らく滞在して当地の諸事情をさぐっている。

慶応2年(1866)には早くも幕府当局に日布条約締結を打診したが一介の商人に過ぎないとして、条約の調印など容認出来ぬと拒絶された。しかし、彼のハワイ熱は一層募り、慶応3年には横浜港からハワイへ雉や家鴨、鶏など鳥類と、松、桑、密柑などの植物を送りこんで日布交渉の実績をかせいだりもしている。

慶応4年(1868)4月には『横浜新報もしほ草』創刊。日本の新聞史の上に、ゆるがぬ評価が与えられる。それから明治3年まで主宰者として岸田吟香と協力関係がつづく。

明治に至るまでの彼の事績はほぼ以上のとおりだが、この間彼は日本通を以て任じ、風俗なども他の外人は多く支那風の傘などをさしている時に彼は日本風の細い蛇の目傘をさし、夏は殿中笠などを被って馬にまたがり、居留地を乗り廻していたことなどが『横浜開港見聞誌』にも描かれていることを、先の資料は伝えている。しかも起居振舞の俊敏さは、若干のいかさま師の要素とともに驚異を呼ぶ人物であったのだろうが、何れにしても、ヘボンやバラードのような立派な米国人とは特に交際もなかったところをみると、人柄の疑わしさを拭い切れないことを小野氏は指摘する。

そのことは、いわゆる明治元年の第一次ハワイ移民の無免許渡航事件に象徴されているとみても誤りではなからう。も

ちろんこの事件の全貌を把えるには、なおハワイ・米国側の資料と併せて事実を客観化する時間が必要であろうが、ここでは最も基礎的な事実関係をはっきりさせるため、外務省編『大日本外交文書』(319.1—G13d)から関係文書の日付と件名を列記して経緯を追うことにしてみよう。

明治元年4月17日

在神奈川亜米利加人ヴァン・リードヨリ
外国事務局輔兼横浜裁判所総督東久世通
禱宛

布哇出稼人ニ対スル渡航免状再下付願出ノ
件。附記 亜米利加人ヴァン・リードカ
無免許備入布哇国へ渡航セシメタル日本人
引戻一件

明治元年4月18日

在神奈川亜米利加人ヴァン・リードヨリ
外国事務局輔兼横浜裁判所総督東久世通
禱宛

布哇出稼人ニ対スル渡航免状再下付方督促
並ニ免状下付セサル意向ナラハ損害ヲ賠償
アリ度旨申入ノ件

明治元年4月20日

在神奈川亜米利加人ヴァン・リードヨリ
外国事務局輔兼神奈川裁判所総督東久世
通禱宛

布哇出稼人ニ対スル渡航免状再下付方督促
ノ件

明治元年4月23日

在神奈川亜米利加人ヴァン・リードヨリ
神奈川裁判所組頭伊藤岩一郎、同高木茂
久左衛門宛

布哇出稼人ノ帰国証ニ関シ各国公使会合ス
ヘキ旨通知ノ件

明治元年4月24日

神奈川裁判所組頭伊藤岩一郎同高木茂久左

衛門ヨリ 在神奈川亞米利加人ヴァン・
リード宛

布哇出稼人ニ関シ各国公使會議ノ次第通報
方要求ノ件

明治元年4月24日

在神奈川亞米利加人ヴァン・リードヨリ

在神奈川外国事務局判事寺島陶藏宛

布哇出稼人許可ニ付第三国ノ公使ニ意見ヲ
求ムルコト不可ナル旨通知ノ件

明治元年4月26日

神奈川裁判所組頭伊藤岩一郎、同高木茂久

左衛門ヨリ在神奈川亞米利加人ヴァン・
リード宛

布哇出稼人ヲ無免許ノ儘出港セシメタルコ
トニ付抗議申入ノ件

明治元年4月27日

在神奈川亞米利加人ヴァン・リードヨリ

神奈川裁判所組頭伊藤岩一郎、同高木茂
久左衛門宛

布哇出稼人无免許出港辨明ノ件

明治元年閏4月3日

外国事務局輔兼神奈川裁判所総督東久世通
禧、外国事務局権輔兼神奈川裁判所副総

督鍋島直大ヨリ 亞米利加辦理工使宛

布哇出稼人无免許出港ノコトニ付亞米利加
人ヴァン・リード取調方要求ノ件

明治元年閏4月5日

亞米利加辦理工使ヨリ 外国事務局兼神奈
川裁判所総督東久世通禧、外国事務局権

輔兼神奈川裁判所副総督鍋島直大宛

布哇出稼人无免許出港事件ニ付干渉シ難キ
モ対策アラハ斡旋スヘキ旨回答ノ件

明治元年閏4月26日

外国官副知事兼神奈川裁判所総督東久世通

禧、神奈川裁判所副総督鍋島直大ヨリ亞
米利加辦理工使宛

布哇出稼人无免許出港ノ故ヲ以テ亞米利加
人ヴァン・リードヲ国外ニ退去セシムルニ

付協議ノ件

長々しく退屈な件名を連ねたが、こ
こで Van Reed の名は『大日本外交文書』
から消え、事件は一段落を迎える。しか
し、Van Reed はこの事件の轟々たる内
外の非難の中で、自らの合法性を主張し
て二度にわたり海外の新聞に抗議文をよ
せ明治5年までその健在ぶりを示してい
るが、翌年日本を離れ、程なくハワイで
没したといわれる。

Van Reed のハワイ移民の斡旋は明治
政府からの強い非難と抗議にさらされた
が、一般的にも、この移民を奴隷と観る
者さえあったことが、さきに挙げた資料
にも記されている。

それは、これより以前に起つたある不
祥事が彼に対する、さらなる非難として
追打ちをかける結果になったのかもしれ
ない。例の高橋是清が、アメリカで知ら
ない間に奴隷に売られていた事件である
が、慶応3年、仙台藩から派遣されて留
学する高橋是清を Van Reed は、サンフ
ランシスコで公証人役場をひらいていた
彼の父親の Van Reed に紹介する。仙台
藩から旅費や学資を受取つて留学斡旋を
行なつたつもりであろうが、当の高橋是
清は留学の筈で渡米したものの学校どこ
ろか、次第に待遇がひどくなり、労働も
苛酷過ぎるので、抗議に出たところ、い
つの間にか数年契約の奴隷に売られてい
た、という話のような事実である（『高
橋是清自伝』千倉書房 昭和11年）。

ただ、いさざか視点をかえて別のもう
一つの逸話を小野秀雄氏の「ヴェンリー
ドの伝」の中に求めて、榎本武揚の談話

に注目する必要もあろう。榎本の談話として、榎本が海路脱走を企てた時 Van Reed は彼にハワイに行くことをすすめたが、その不可能を感じて応じなかつたという。Van Reed の意図が奈辺にあるかは判らないが、彼の佐幕的言動が、時に新政府をして硬化せしめ、Van Reed ほどの日本通をそれなりに遇しなかつたばかりか、例のハワイ出稼人斡旋にも外務省は徹頭徹尾反対の立場をとつた。そのかくされた理由もあるのではないかと。ともあれ、幕末から明治に渡来した外国人は、企業的野心を内に燃やしていた者が多かつたであろうし、当時の日本人もまた、外国人の多くに過大な期待を寄せてもいたことは、今の我々の想像を遙かに越えた状況だつたと思われる。Van Reed などは、その状況が生んだ一人の特異な人間像でもあろう。

4 Van Reed と『横浜新報もしほ草』

『横浜新報もしほ草』は Van Reed の主宰するところであり実際の編集は岸田吟香、栗田万次郎である。Van Reed の居宅である居留地93番地の発行の故に、慶応4年の太政官布告の影響も受けなかつたから、明治3年3月までつづき、そのため江戸の民営新聞が、その発行を停止されて全く無新聞の時代にも、『もし

ほ草』のみは健在で、42号を重ね、2年間継続刊行したことは、当時稀なることであつた。当時の新聞が何れも佐幕的傾向が強く、『横浜新報もしほ草』もその例に洩れないが、特筆すべきことは、維新紛乱の虚に乗ずる外国勢力の脅威を、繰返し国民に警告しているが、これは Van Reed の卓見ではなかつたかと評価される向きがあるが、そのことは、翻刻版の『横浜新報もしほ草』及び『幕末明治新聞全集』の解題中の小野秀雄氏の「ヴェンリード (Eugene M. Van Reed) の伝」に詳しいことと、併せて、前掲の杉山栄氏による「先駆者 岸田吟香」中の「『もしほ草』の協業者 ヴァン・リード」を見れば足りる。因みに、当館における『横浜新報もしほ草』の所蔵状況を付記してこの稿を了える。

横浜新報もしほ草

原紙 1—29 慶応4.11—明治1.11.13

欠：28 (WB43—23)

写本 1—37 慶応4.11—明治2.4.10

欠：15—20 (211—214)

翻刻版：1—42

横浜新報もしほ草 小野秀雄改訂

(070.21—M879—O)

幕末明治新聞全集 4 (071—M448b)

(ふくだ・みつこ：経済社会課主査)